

# 沖縄島のダムにおけるオオクチバス対策の現況と今後について

○宮本真琴（一般財団法人沖縄県環境科学センター），中尾芳典（同）  
町田宗久（沖縄総合事務局北部ダム統合管理事務所）平山千尋（同）

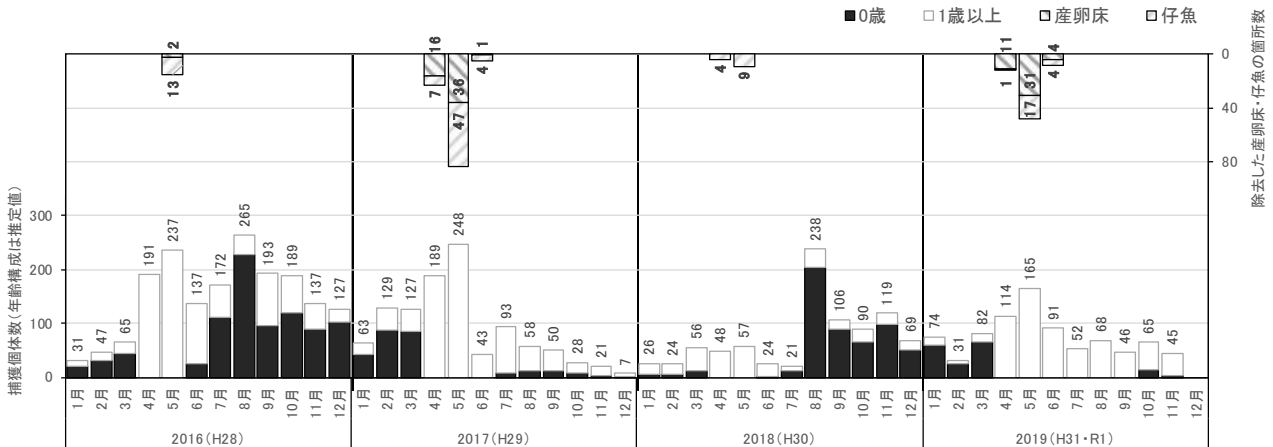
## 1. はじめに

漢那ダムは沖縄県国頭郡宜野座村に位置し、平成 5 年に供用を開始した国が管理する多目的ダムで、平成 24 年にオオクチバスの侵入が確認されました。オオクチバスの侵入により、ダム湖内に生息するタウナギ属の 1 種やタイワンキンギョ（どちらも環境省 RL で絶滅危惧 IA 類）といった重要種を含む魚類、水生昆虫類、甲殻類などの在来生物が大きな影響を受けると考えられました。ダムを管理する北部ダム統合管理事務所では、オオクチバスの確認直後から対策を開始し、専門家の意見などを取り入れながら対策を進めています。

## 2. 現在の取り組みとこれまでの調査結果

早春季～初夏にかけての繁殖期には、繁殖抑制を目的とした産卵床の破壊と仔魚の捕獲（潜水）および親魚の捕獲（電気ショッカーボート（ESB）、釣り等）を実施しています。夏季～冬季にかけての非繁殖期には、個体数密度の低下を目的とした親魚の捕獲（釣り、モリつき、ESB の各手法からその時期に最適な方法を選択）を実施しています。

- ・平成 29 年、平成 31 年は、繁殖期に産卵床の破壊や親魚の捕獲を集中して実施することで加入個体数を大幅に抑制し、低密度化することができた。しかし、平成 28 年、平成 30 年の繁殖抑制は効果的でなく、加入個体数を抑制できなかった。
- ・人工産卵装置による繁殖抑制を平成 25 年～28 年に実施したが、1 度も利用されなかった。
- ・産卵は岩壁や泥の堆積の少ない石礫の上で行われることが多い（一般的な情報と異なる）。
- ・過去の調査では産卵床を積極的に保護する親個体はほとんどみられなかったが、在来ハゼ類の個体数が増加した平成 31 年は、保護する親個体が増加した（調査者の感覚として）。
- ・調査結果の評価を目的に、これまでに標識再捕獲法及び VPA (Virtual population analysis) による個体数の推定を行ったが、精度に課題が残る。



※1. 毎年4月1日に1歳年齢が上がるものとした。各月の体長組成から0歳と1歳以上で概ね区分し、区分できない個体は過去に実施した耳石による年齢査定結果を基に年齢を推定した。  
2. 各月の捕獲努力量は異なる。

図1 直近4年間のオオクチバス捕獲個体数と産卵床・仔魚除去箇所数

## 3. 今後何をすべきか

湖岸部において在来生物が回復する程度までの低密度化は実現できました。ただ、ここからの取り組みが重要なポイントになることも理解しています。

- 低密度状況下での更なる繁殖抑制の方法、アイデアは？
- 大型個体や稚魚の効率的・効果的な捕獲方法は？
- 今後、どうモニタリングし、どういう手法で根絶させるべき？